



#リスペクト

令和8年 5月29日

江東区立有明中学校

校長 西川 諭

<https://ariake-chu.koto.ed.jp/>

学び続ける人 心豊かで、思いやりの有る人 明るく、健やかな人

No. 3

#リスペクトから考える「いじめ」のこと～安心して過ごせる学校を、みんなでつくるために～

図解版は HP で

●新年度が始まり、約2か月が過ぎました。

新しい学級、友達、先生との出会い。そして、学校行事。これらを経て慣れてきた生徒も多いと思います。一方で、この時期は、人間関係の疲れや小さなズレが見え始める時期でもあります。

だからこそ、今、本校では改めて、「いじめ」について、一緒に考えていきたいと思っています。

●「悪気がなかった」で、人は傷つくことがある
近年、いじめについての研究は大きく進んでいます。その中で分かってきたことの一つは、

加害者自身が、気づかずに相手を傷つけていることがある

ということなのです。

「遊びだった」「ノリだった」「みんな笑っていた」「相手も嫌がっていないと思った」

そうした認識のまま、人を深く傷つけてしまうことがあります。

本校では、「悪気がなければ仕方ない」とは考えません。同時に、「悪い人を探して終わり」にもしません。大切なのは、

「なぜ、その状況が起きたのか」

「どうすれば安心して過ごせる環境になるのか」を考えることです。

●「力の差」があると、人は「やめて」を言えなくなる

2つの重要なワードを紹介します。いじめの研究では、①「アンバランス・パワー（力の差）」という言葉があります。

ここでいう「力」は腕力ではありません。

人数の差。先輩と後輩の関係。学級内での立場。部活動での影響力。SNSでの発信力。

そして、

「力の差」があると、被害を受けている側は、「やめて」と言えなくなったり、反撃できなくなったりします。

例えば、「3人で1人に言う」「先輩が後輩に言う」「クラスの中の中心の人が言う」。

そうすると、本当は嫌でも、笑って合わせるしかなくなることがあります。

周りから見ると、「ふざけ合っている」ように見えても、本人は苦しんでいる場合もあります。

しかし、加害側は、その「力の差」に気づいて

いないことが多いのです。

「仲が良いと思っていた」「これくらい普通だと思っていた」

そう考えてしまうことがあるのです。

●「間違った考え」が起きることがある

もう一つのワードは、②「シンキング・エラー（間違った考え）」です。

人は、自分が悪いことをしているとは思いたくありません。そのため、

「相手も楽しんでいる」「嫌なら言えばいい」

「みんな笑っているから大丈夫」

など、「自分の行動を正当化」してしまふことがあります。これが「間違った考え」です。

しかし、それによって、本人に悪気がないまま、相手を深く傷つけてしまうことがあります。

だからこそ、本校では、「力の差はなかったか」「相手は本当に嫌ではなかったか」を考えることを大切にしていきたいと思っています。

●実は「周りの人」が大きな力を持っている

いじめの約80～85%は、「周りに人がいる場所」で起きていると言われています。

つまり、多くの場において、「見ている人（傍観者）」がいるということです。そして、

傍観者が「何らかの行動」を起こした場合、約57%のいじめが、「数秒以内」に止まる

という研究結果があります。

この行動は、勇気を出して立ち向かう行動ではありません。「一緒にトイレに行こう」「あっちで先生が呼んでるよ」と言ってその場から離れる。あるいは、先生や大人にこっそり相談する。そうした行動も大切な「誰かを守る行動」です。

●「#リスペクト」の学校へ

自分自身を大切にすること。そして、相手を大切にすること。

安心して過ごせる学校は、大人だけでつくることはできません。生徒一人一人の言葉、行動が、リスペクトの学校をつくっていきます。

6月は「ふれあい月間」です。生徒たちと改めて「いじめ」について考えます。ご家庭・地域の皆様とも連携しながら、生徒たちが安心してSOSを出せる学校づくりを、引き続き進めてまいります。



3年・修学旅行（4月28～30日）

仲間と創り上げた3日間

3年生は広島・奈良・京都への修学旅行を実施しました。仲間と協力して行動し、班で声を掛け合いながら過ごした3日間は、多くの学びと成長につながる時間となりました。歴史や文化に直接触れるだけでなく、時間を意識して動くことや、周囲を考えて行動することなど、集団生活の中で大切な力も学びました。



運動会（5月12日）

本気とリスペクトがあふれた一日

有明アリーナで運動会を実施しました。競技や応援に全力で取り組む姿、仲間に声をかけ励まし合う姿など、生徒たちの「本気」がたくさん見られた一日となりました。今年度は、1～3年A・B・C組とF組の生徒が、これまで以上に交流しながら運動会を創り上げました。互いに応援し合う姿や、リスペクトしながら活動する姿に、有明中学校らしさが表れていました。



歌舞伎教室（5月19日）

日本の伝統文化にふれる時間

3年生を対象に、歌舞伎俳優の四代目市川九團次さんをお招きし、「歌舞伎教室」を実施しました。歌舞伎の歴史や魅力についてのお話だけでなく、見得（みえ）や歩き方などの実演、生徒+教員の体験コーナーもあり、体育館は大いに盛り上がりしました。実際の演技や舞踊に触れる中で、生徒たちは日本の伝統文化の奥深さや表現の豊かさを感じることができました。



授業の様子

社会 2学年 中世からの脱却
授業者：榊原 教諭



【校長より】今回は、社会科の授業にお邪魔しました。ワークシートとデジタル教科書を効果的に活用し、生徒との対話を重ねながら、共に授業をつくり上げていくスタイルの授業でした。

授業者として、生徒の興味を引き付けるために何が必要か。榊原教諭の授業を見ながら、これまで様々な工夫や試行錯誤を積み重ねてきたことが伝わってきました。

例えば、「目線」。教員の温かい目線は、黒板への板書やタブレット操作の時間を除けば、ほとんど生徒に向けられていました。ただ教室全体を見るのではなく、「一人一人を見取る目線」を意識していることが感じられました。

発言したい生徒を的確に見つけ、答えを引き出し、その場でしっかりと認め、評価していく。こうしたことは一見些細なようですが、「見取りの技術」とともに、教える内容が十分に整理され、自分の中に入っていないと、なかなかできることではありません。

理想は「先生が、自分だけに向けては話をしてくれている」と一人一人の生徒が感じられる目線です。

いかなる授業であっても、「見てもらえている」「認めてもらえている」という実感は、生徒の学習意欲や授業への関心を支える大切な土台になります。本校でも、こうした視点を大切にしながら、授業改善に取り組んでまいります。